

2) 飼育アユと漁獲アユの乾燥重量の比較

遠藤 誠・酒井明久

【背景】近年アユ種苗の弱体化すなわち歩留りの低下や飼育の困難さが言われ、湖産アユの種苗としての質が問われている。

【目的】漁獲アユと飼育アユの乾燥重量の比較において漁獲アユの状態を把握し、漁獲アユの生残状況と合わせ乾燥重量の種苗の評価の指標の可能性を検討した。

【成果の概要】

- 1.乾燥重量の測定は、105℃・24時間の条件で50尾行った。飼育アユの乾燥重量は、1993年12月えりで漁獲されたアユを1994年3月まで飼育し、1週間毎に1回測定した。漁獲アユは、えりについては1994年12月・1995年2月～7月まで、やなについては4月～7月まで、沖曳網については1月2月の各月1回測定した。
- 2.(1)えり種苗の乾燥重量は、各月とも飼育アユの乾燥重量と体長との関係に概ね一致していた(図1)。
(2)やな種苗の乾燥重量は、4月期が飼育アユに比べやや痩せているが、えり種苗と同様概ね飼育アユの乾燥重量・体長関係に一致していた(図2)。
(3)沖曳網種苗の乾燥重量は1月期がバラツキが大きい傾向が見られるが、えり・やな種苗と同様概ね飼育アユの乾燥重量・体長関係に一致していた(図3)。
- 3.1995年種苗の漁獲後7日間ほどの初期生残は、沖曳網種苗特に1月の沖曳網種苗を除いて概ね良好であった(本報告：アユ種苗の飼育試験(1995年)参照)。従って、飼育アユと漁獲アユで乾燥重量の差が余り無かったと思われる。
- 4.通常、初期歩留りの悪い沖曳網種苗の乾燥重量を1991年から1996年で比較すると、'91年を除く5年間は体長・乾燥重量の関係はほぼ一致していたが、'91年だけ乾燥重量は重かった(図4)。「91年の初期生残は良好であるが、乾燥重量が軽かった'91年以外の5年間の内の'92年・'93年も初期生残は良好であり、単純に乾燥重量の重い種苗が初期歩留りが良いわけではなかった(表)。

【成果の活用】乾燥重量は簡単に測定できるので、種苗評価の指標の可能性についてより詳細に検討する。

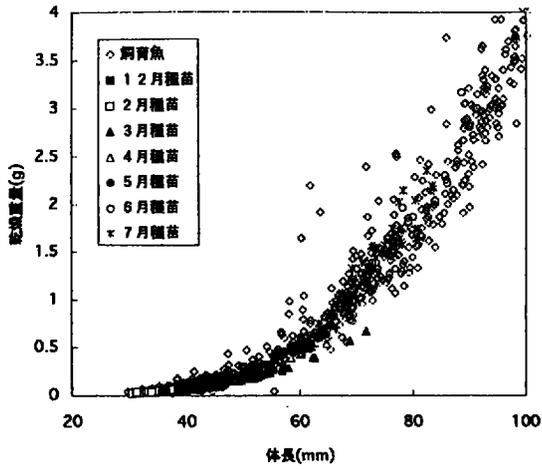


図1 飼育魚とえり種苗の体長・乾燥重量

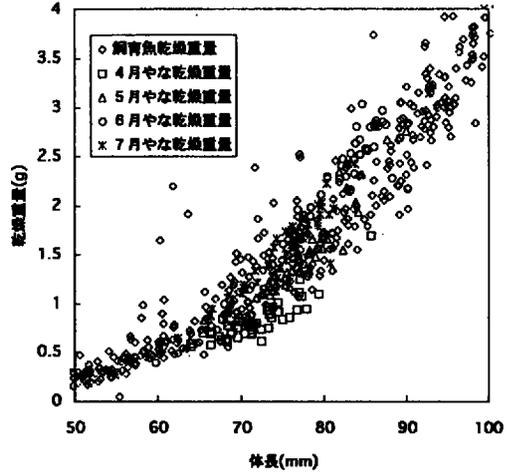


図2 飼育魚とやな種苗の体長・乾燥重量

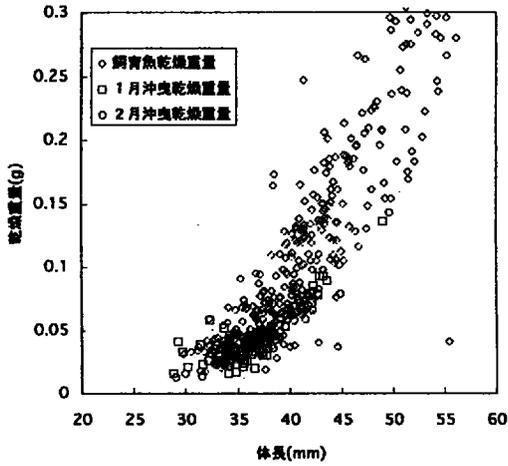


図3 飼育魚と沖島網種苗の体長・乾燥重量

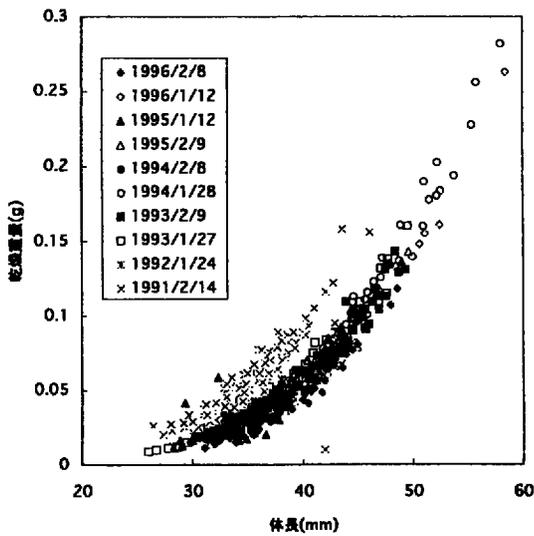


図4 沖島網種苗の体長・乾燥重量関係の経年比較

表 沖島網種苗の試験飼育の結果の経年比較

漁獲年月日	生存率 (%)		
	3日目	7日目	14日目
1991/2/14	90	87	
1992/1/24	80	78	
1993/2/9	93	91	
1994/1/28	21.4	17.3	6.5
1994/2/8	30.4	25.8	6.5
1995/1/12	61.9	57.6	45.5
1995/2/9	76.3	73.7	35.9
1996/1/12	59.4	51.1	44.3
1996/2/8	74.5	61.5	24.5